プラトン『ゴルギアス』篇研究
―プラトンの初期哲学における哲学と政治の関係を中心に―

石黒亜加里

本論考では、ギリシアの哲学者プラトンの初期対話篇の一つ『ゴルギアス』篇を取り上げる。『ゴルギアス』篇は三部構成をとっており、最初の対話者ゴルギアスとソクラテスの対話においては、弁論術とは何についての技術であるかという問題がとりあげられ、二人目の対話者ポロスとは、不正を行うことと受けることのどちらが不幸かという点へと議論が展開していく。三人目の対話者カリクレスとの対話では、政治的な生き方と哲学的な生き方について、どちらを選択するべきなのかという点を中心に、当時のアテナイの現実の政治批判にまでふみこんだ議論が繰り広げられている。さらに、対話篇の最終部では、人間の死後の「魂」（プシューケー）の裁きについての「物語」（ミュートス）が語られるという筋立てをとっている。

一見すると、三人の対話者とソクラテスの対話は、テーマとして連続性のないようにも思われるが、すべての対話の中で「正」と「不正」の問題が論点として含まれており、特にカリクレスとの対話においては、「正」と「不正」の問題から人間の生き方の問題へと議論が展開しているのである。カリクレスとの対話は、他の対話者との対話と比較して圧倒的に分量が多く、ソクラテスが自らすすんで積極的に自説を展開しているのが特長であり、そこでは「哲学」（ピロソピアー）という語が多用されているという点からも、対話篇全編をとおして、もっとも重要な部分であると考えられる。

本論考では、『ゴルギアス』篇第三部の中核をなしていると考えられる「政治活動をして生きるべきか、知恵を愛し求める哲学の中で生きるべきか、この両者のいずれに優があるのか」という問いを重点的にとりあげ、プラトンの初期哲学における政治と哲学の関係を明らかにすることを目的とする。さらに、以上のことをとおして、『国家』篇における「哲人政治」の思想への展望についても探っていきたい。

上記の問いは、一見すると「政治」と「哲学」の二者択一の問題のようにもみえるが、実は現実政治と「哲学」を対立させた問題である。以上のことを確認したうえで、まず、ソクラテスとカリクレス両者の「政治」と「哲学」の解釈に一致があったのかどうかを考察した。その結果、カリクレスにおいては「哲学というのは、若い年頃にたしなむべき「教養」にすぎず、国家社会の一員として生活していく上では何の意味ももたないどころか、人を「劣悪な者」にしてしまうような技術のことを指している。これに対して「政治」というのは、富や名声を得て、自らが幸福になるための手段として位置づけられている。

一方、ソクラテスにおいて「哲学」というのは「知恵を愛し求める」という行為であり、それによって人は「より善い者」となることが可能なものである。ソクラテスにおいて「政治」というのは、「魂の世話」をすることであり、「市民をよりすぐれた人間へと導く」ことを目的とするものである。「真の意味での政治の技術」（521d6）を身につけている者はソクラテスだけであって、人々と一問一答で議論をして回るというソクラテスの活動がまさにそれにあたるとみなすことができるだろう。このようにみると、ソクラテスにとって「哲学」と「政治」は相互に結びつくものであって、その点からも「政治」と「哲学」についてのソクラテスとカリクレスとの間の見解がまったく異なっているということがわかる。

本論考で着目した「政治的な生き方をするべきか、哲学的な生き方をするべきか」という問いに関しては、この問いの二者択一的な構造それ自体は「政治」と「哲学」についてのカリクレスの見解にのっとったものであり、ソクラテス自身が「哲学者」としての生き方を二者択一的な視点に立ってとらえているわけではないのである。

対話篇の最終部において、ソクラテスによって語られる「物語」においては、生前に善い行ないをしていた者の「魂」は幸福になることができるため、そのように最善を目指しながら生きる必要があるという点に重点がおかれている。「幸福」という観点に立った場合、ソクラテスとカリクレスそれぞれの人生の目的が正反対であるということがわかる。カリクレスにとって、人生の目的とは「富や名声を得ること」である

のに対して、ソクラテスにとっては「死後に幸福な生活をおくること」であると言える。カリクレスが現世的な幸福観に立っているのに対して、ソクラテスのほうは人間が「幸福である」ことを「死後」の世界にまで拡大して理解しているのである。

以上の「物語」は、プラトンの政治哲学観について正しく理解するうえで、非常に重要な意味を含んでいる。ソクラテスが対話篇の末尾で「物語」を語るという形式は、中期対話篇を代表する『パイドン』篇や『国家』篇などと共通する重要な要素であり、初期対話篇においては『ゴルギアス』篇において初めて導入されたものである。

「物語」においてソクラテスが主張したことは、人は死ぬと「魂」と身体が分離し、生前に善い人間だった者の「魂」は「善い魂」としての報酬を受ける一方、悪い行いをした者の「魂」は「醜い魂」となって、しかるべき処遇を受けることになるという。すなわち「善い魂」は幸福者の島へとおもむき、「醜い魂」は奈落へと送られる。「善い魂」を持つ人間というのは、ソクラテスの主張によれば、神を敬い、真理や徳を修め、健全であるよう務めた「哲学者」のことである。そのためにソクラテスは、常に最善を目指し、よりすぐれた人間となるように務め、また、出来る範囲で、他人にもそのような生き方を勧めているという。反対に、カリクレスのような欲望の無制限の充足を目的とするような生き方は「魂」が醜いものとなってしまうので、「奈落」へと送られてしまうとされている。

ここから明らかになってくるのは、つぎのような哲学観である。すなわち「最善」を目的とし、知恵を愛し求めることや徳を修めながら生きること、これらのすべては「魂」の幸福の実現のために必要なことであり、それは人間の死後において達成されるものであるということである。この「魂への配慮」こそ、プラトンが目指したものであったということができるだろう。

以上のことから、プラトンの思想の根幹をなすのは、あくまでも「哲学」であるということが明らかになる。これまでの議論では「哲学」と「政治」が相互に結びつくものであるということを確認した。ソクラテスの理解に立った「政治」とは「市民が

よりすぐれた人間になるよう導いていくものである」ということを確認した。以上のことから考えられることは、「政治」を行う人間は自らも「最善」を目指している必要があり、つまり「哲学」をしている人間でなければならないというということである。プラトンにおける政治観とは、自らも哲学をしている人間による「政治」の実践が、市民の、そして国家全体のためになるということだと言えるだろう。『ゴルギアス』篇においては、中期対話篇に位置づけられる『国家』篇で明確に提示される「哲人政治」の思想への展望が伏線として提示されていると考えられる。

プラトン哲学研究においては、対話篇から読みとることのできるプラトンの思想を、発展史視点に立って、その展開の道筋をたどるという方法が主流をしめてきた。しかし、そのような方法は、プラトンの政治哲学という観点に立って『ゴルギアス』篇を読み解く場合において、かならずしも有効な手法とは言えないだろう。『ゴルギアス』篇において確認できる政治哲学の基本構想は、明確に『国家』篇における政治哲学への展望としてみることができるからである。これまでのように、各対話篇を直線的に順序立てて、プラトン哲学の展開の道筋をたどるという方向だけでなく、対話篇相互の論点の重なりに着目して、プラトンの問題認識が多方向に展開しているという流れにそって、プラトンの哲学の展開をたどるということも、プラトン解釈の手法として十分可能ではないかと思われる。